

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.47

発行 2011.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 鈴木 由紀夫

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp



たたきみしまぞうがんかいやしめぎょもんつぼ
叩き三島象嵌貝焼締魚文壺

館蔵資料 (21-8217) 14代中里太郎右衛門氏贈

中里逢庵 (1923~2009)

平成13年 (2001)

口 径：15.6cm
胴 径：31.5cm
高 さ：32.2cm
底 径：20.2cm

中里逢庵は唐津藩の御用窯の流れをくむ中里家の13代太郎右衛門 (平成14年から逢庵) として日展を中心に活躍した陶芸家。伝統技法にのっとりながら、斬新な造形を目指して意欲的に作陶活動をおこないました。昭和56年に内閣総理大臣賞、同59年には日本芸術院賞を受賞しました。

この作品は胴中央やや上で膨らんだ壺で、叩き技法で薄く成形されており非常に軽い。胴部に白、黄、黒色の土で数種類の魚を象嵌しています。貝焼締とは、匣鉢 (さや) に作品を入れて、隙間に貝殻を詰めて焼成する手法です。貝殻の成分が器面に浸み込んで自然釉となり、茶褐色から暗緑色に発色しています。平成13年、第33回日展の出品作です。

平成19年には日本芸術院会員に任命され、平成20年から日展顧問をつとめました。平成21年に逝去されました。

平成23年度特別展のお知らせ

「海を渡った古伊万里～セラミック・ロード～」展

○趣 旨

17世紀の初期に佐賀県の有田で、日本ではじめて磁器が焼かれました。有田磁器は一般には「古伊万里」の名で知られ、17世紀の後半からはオランダ東インド会社の船に大量に積み込まれ、世界各国へと輸出されました。その輸送の際、長崎・出島からヨーロッパ各国へ古伊万里を運んだ航路のことを、「セラミックロード」といいます。

華麗で優美な色絵の古伊万里は、ヨーロッパの人々の間でブームとなり、また東南アジアにも多数輸出されるなど、全世界に広がりました。当時輸出された古伊万里の数は、公式記録でもその数300万個以上と言われており、古伊万里に対する世界的熱狂ぶりがうかがえます。

展覧会では、館蔵資料の中から選定した約150点の古伊万里作品を展示・紹介します。

平成28年(2016)に有田町を中心に“有田焼400年祭”が開催されますが、本展覧会はそのイベントのひとつとして位置づけ、ヨーロッパなど海外に輸出された「古伊万里」の魅力をもっと紹介することを目的としています。

○主催及び会場

佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2展示室

○会 期 平成23年10月1日(土)～12月4日(日)
44日間

○休 館 日 月曜日

○出品点数 151点(予定)

○観 覧 料 無料

○展示解説 10月8日(土)、11月5日(土)
14:00～15:00

○記念講演 10月22日(土) 13:30～15:00(予定)



色絵八橋文水注(ケンテイ)
肥前・有田窯 1660～80年代



色絵花鳥文皿
肥前・有田窯 1670～90年代



染付牡丹鳳凰文蓋付八角大壺
肥前・有田窯 1690～1730年代



色絵ウィレム4世像瓶
肥前・有田窯 オランダ上絵
17世紀後半の素地

テーマ展 高取邸 もてなしの茶会

- 会 期 平成23年5月14日(土)～6月12日(日)
- 内 容 高取伊好夫人志那は長崎育ち。夫人好みの異国的で多彩な器の取合せを展示します。
- 展示数 50件 70点 (予定)
- 会 場 第1展示室



刷毛目薄文四方手塩皿
肥前・現川 1690～1740年代
高取紀子氏贈

新収蔵品展

- 会 期 平成23年5月14日(土)～6月12日(日)
- 内 容 平成22年度に寄贈を受けて、新たに館蔵となった古陶磁などの作品を展示します。
- 展示数 150件 200点 (予定)
- 会 場 第2展示室



鉄釉緑彩櫛刷毛目文大鉢(二彩手)
肥前・唐津 17世紀後半～18世紀初

テーマ展 見つけよう やきもの昆虫採集

- 会 期 平成23年7月30日(土)～8月28日(日)
- 内 容 蝶などのさまざまな昆虫が描かれた陶磁器を展示します。
- 展示数 40件 50点 (予定)
- 会 場 第1展示室



色絵蝶文花形皿
肥前・有田 1650～60年代
柴田夫妻コレクション1-47

テーマ展 新春展 干支 龍の文様

- 会 期 平成23年12月16日(金)
～平成24年1月15日(日)
- 内 容 平成24年の干支である辰(龍)にちなんだ陶磁器を展示します。
- 展示数 50件 60点 (予定)
- 会 場 第1展示室



色絵龍文大皿
肥前・有田 1690～1730年代

ヨーロッパの肥前陶磁器を訪ねて7
イベリア半島の肥前磁器
 Hizen Porcelain in Iberian Peninsula

TANAKA, Shigeko

田中恵子 ●日本アジア協会副会長
 ●東洋陶磁学会（日本）会員
 ●The Oriental Ceramic Society(London)会員

館報46号までは英国の肥前磁器コレクションで日本にはあまり知られていない5カ所を紹介したが、今回はここ数年のイベリア半島、及びそこに至るスペイン貿易のルート上で実見した17世紀の肥前磁器を紹介し、他の地域の資料との比較研究に役立てたい。

2006年7月キューバ(Cuba)のハバナ(Havana)、2007年4月のメキシコ(Mexico)のオアハカOaxaca)、2008年7月のスペイン(Spain)のカディス(Cadiz)、と3カ所で発掘された陶片、2009年3月のスペインのマドリッド(Madrid)では美術館に伝世する完品としての1660-80年代の肥前の染付のチョコレート・カップ(chocolate cup)(挿図5-10)との出会いがあったことを、「メキシコ、キューバ、スペインでの4個の肥前染付のチョコレート・カップの発見—17世紀のスペイン貿易による知られざる肥前磁器の交易ルート」として、2010年2月発行の九州近世陶磁学会の論文集で報告したが(pp.307-312)、カディス港から更に海上貿易によって運ばれた肥前磁器があったのではないかと、スペインの地中海沿岸のバルセロナ(Barcelona)、バレンシア(Valencia)、当時スペインの統治下にあったシシリー(Sicily)のパレルモ(Palermo)にも足を伸ばしたが、肥前のチョコレート・カップは見当たらず、イベリア半島の大西洋岸ではどうかと2010年3月にポルトガル(Portugal)の首都リスボン(Lisbon)を訪れた。駐日ポルトガル大使館から紹介された10カ所の美術館と3カ所の旧王宮、さらにザナッティ(Zanatti)駐日ポルトガル大使の助

言により、中国の染付の皿がびっしりと架けられている四角錐の天井を持つ陶磁の間がある、現在フランス大使公邸になっているサントス宮殿(Le palais de Santos)を加えて14カ所を見てまわったが、肥前磁器があった2カ所の美術館にも肥前の染付のチョコレート・カップはなく、美術館の東洋陶磁の藏品は圧倒的に中国陶磁であった。

3カ所の旧王宮では、1カ所は中国陶磁のみで、2カ所に中国陶磁に混じって日本陶磁が飾られていたが、染付のチョコレート・カップはなかった。アジューダ宮殿(Palácio Nacional da Ajuda)で案内してくれたMrs Cristina Neiva Correiaが、最後に取蔵庫で、藏品目録には18世紀の古九谷様式と書かれている一枚の皿を出してくれたのを見ると、17世紀古九谷様式の色絵の皿であった。高台の下に金属の飾りの台がつけられ、台も高台のまわりも金色に塗られ、皿の口縁部は12区画の文様毎に稜花形の浅い切れ込みが入り、向かい合う文様は対をなし、見込みには青緑の葉に覆われた根元から伸びた二枝の撫子が先に赤い花を5個つけて描かれている。外側面には一方に片寄せて2カ所、赤い花に緑の葉の折枝文が描かれ、高台の中央には染付で福マークが釉下に記される。それを取り囲むように王室取蔵品であったことを示すN° 498が黒い墨状のもので、その反対側には現在の所蔵目録番号Inv° 49220が青で釉上に書かれている。(挿図1,2,3,4)



図1,2
 色絵撫子文輪花皿
 有田 1650~60年代
 アジューダ宮殿所蔵
 口径 14.5cm
 高さ 4.5cm
 底径 8.5cm
 田中恵子 撮影



図3,4
 同皿の外側面
 2カ所の折枝文
 アジューダ宮殿提供

ロンドンに戻ってからこの皿の写真をメールに添付して九州陶磁文化館特別学芸顧問の大橋康二氏に送ったところ、1650-60年代の従来古九谷と呼ばれていた有田の「初期色絵」で、こうした初期色絵のヨーロッパ輸出の事例が増えてきて、これはその面白い資料とのことであった。戸栗美術館の森由美さんからは、大橋さんから既にご教示があったと思うが、と、柴田コレクションのパートⅦ-87（総目録ではP75の0537番）にほとんど同じ文様の皿があることをお教え戴いた。柴田コレクションに入っている皿は国内向けに作られたと今まで考えられてきたものであるが、その同類がどのような経緯でこのように飾りの台がつけられて、今、リスボンにあるのか。この旧王宮には現在この種の皿は1点しかないとのことであるが、高台まわりに台をつけて高くしたのは、なにかを盛って長いテーブルの中央部分に複数、置いたためと考えられるので、他で同類が発見される可能性がある。

所蔵番号の書き方から王室所蔵品となった年代がわかるかどうか、またこの金属の台の加工の仕方で、加

工された年代と場所がわかるかを尋ねたが、それは不明で、これからの研究を待たねばならない。ポルトガルの王室が1910年に倒れて王家の人々がブラジル(Brazil)に逃れる際に、その所蔵品もブラジルに送られたが、後にポルトガルに送り返されたり、オークションで買い戻されたものもあって、アジュダ宮殿は一時収蔵庫として使われていたという。1938年に旧王宮を美術館として国民に開放した時に、旧王室の所蔵品はいくつかの旧王宮と美術館に分配され一般公開されることになったが、17,000点にも及ぶ蔵品の研究はまだこれからとのことである。リスボンは1755年に地震で大きな被害を受けており、それより前に遡って調べることは難しい。ポルトガルの王室とヨーロッパの王室、特にスペイン王室との婚姻関係は濃く、贈り物のやりとりなどで、台がつけられた状態でリスボンに入って来た可能性もあり、この台の加工の仕方、蔵品目録の番号などの研究が進むに従って、新たな情報が西欧の研究者からもたらされることを願っているが、どちらかで類品をご覧の方はご一報いただきたい。



図5 染付草花文碗(チョコレートカップ)
有田 1660~80年代
ハバナ考古博物館所蔵
口径7.5cm、高さ8.0cm、底径4.0cm
田中恵子撮影



図7 染付牡丹文碗(チョコレートカップ)
有田 1660~80年代
カティス博物館所蔵
口径7.5cm、高さ7.5cm、底径3.7cm
カティス博物館提供



図9 染付草花文碗(チョコレートカップ)
有田 1660~80年代
マドリッド装飾美術館所蔵
口径8.3cm、高さ7.4cm
田中恵子撮影



図6 染付草花文碗(チョコレートカップ)
有田 1660~80年代
オハカド文化館所蔵
中島寿子撮影



図8 同上のチョコレートカップの底面
「大明年製」銘
カティス博物館提供



図10 同上のチョコレートカップの底面
「大明年製」銘
マドリッド装飾美術館提供

開館30周年記念特別企画展の報告

「珠玉の九州陶磁」展

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第1・第2・第3展示室
- 会期 平成22年10月2日(土)～11月14日(日)
44日間(会期中無休)
- 出品点数 202件 251点
- 展示内容

九州陶磁文化館の開館30周年という節目の年にあたり、あらためて当館設立の趣意に基づく九州の陶磁器の源流と展開を、九州各県はもとより、全国に所蔵される名品によって展覧しました。

展覧会では、江戸時代に飛躍的な発展を遂げ、この時代にもっともやきもの生産が盛んであった唐津、上野、高取、小代、八代、薩摩、壺屋などの九州の陶器

と日本初の磁器として世界に輸出された伊万里をはじめ、鍋島、平戸などの磁器からなる多彩な九州陶磁を展示・紹介しました。

- 観覧料 大人 600円(500円)
大学生 300円(200円)
※()内は20名以上の団体料金
高校生以下、障害者は無料

- 関連行事
記念講演会10月30日(土) 13:30～15:00
「九州がやきもの王国になった理由と発展の歴史」
大橋康二(当館 特別学芸顧問)
記念茶会 10月31日(日)、11月7日(日) 13:00～
展示解説 会期中毎週土曜日 14:00～15:00
(ただし、10月30日のみ11:00～12:00)



開会式の様子



展示解説の様子



記念茶会の様子



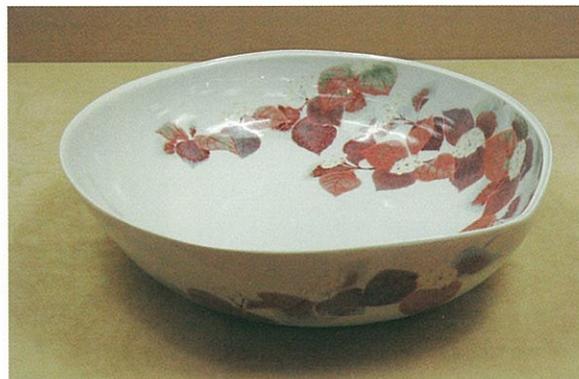
展示状況

第107回 九州山口陶磁展

- 会期 平成22年4月29日(木)～5月10日(月)
12日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として今回第107回目を迎えました。

今回の展覧会では、第1位の田中忍氏の「白い夏-VII」をはじめ、93点の入賞・入選作品が展示されました。



第1位 文部科学大臣賞
田中忍 白い夏-VII

新収蔵品展 I

○会 期 平成22年5月14日(金)～6月6日(日)
21日間

平成21年度に柴田祐子氏より寄贈された江戸時代の有田磁器など、254件719点を展示しました。

5月30日には、講堂でレコード鑑賞友の会10周年記念コンサートおよび茶室では記念茶会が開催されました。



新収蔵品展 II

○会 期 平成22年6月11日(金)～7月4日(日)
21日間

平成21年度に寄贈を受け、新たに館蔵となった唐津焼の鉄釉瓶などの古陶磁、中里逢庵氏や藤井朱明氏の現代作など258件311点を展示しました。



テーマ展 オランダ絵伊万里

○会 期 平成22年11月20日(土)～12月2日(木)
21日間

江戸時代にオランダ人やオランダ帆船、西洋風景などを描いた有田磁器が作られ、「オランダ絵伊万里」とか「紅毛絵伊万里」などと呼ばれています。展覧会ではオランダ人や西洋風景を描いた有田磁器など38件58点を展示しました。



新春展 干支 兎の文様

○会 期 平成22年12月17日(金)
～平成23年1月16日(月) 26日間

今年の干支・兎にちなんで有田焼や唐津焼などに用いられた様々な兎の文様を取り上げました。草原や波間を駆け抜ける月兎や波兎のエピソードのほか、兎文様を白抜きにした墨弾や、兎の姿をかたどる型打の皿、兎形手焙の製作工程など、やきもの特有の装飾技法や製作技法も合わせて紹介し、46件60点を展示しました。



テーマ展 金彩・銀彩の世界

○会 期 平成23年2月2日(水)～2月20日(日)
17日間

日本ではじめて金彩・銀彩を施した磁器が焼かれたのは有田でした。本展では1650年代以降、有田で作られた金銀彩の華やかできらびやかな色絵磁器を中心に71件118点を展示しました。



シリーズ

やきものの技法(42)

なか がみ
仲 だ ち 紙

江戸時代の有田焼には、端正な組皿が多くみられます。特に鍋島焼には、遠目では個体差が分からないほど、厳密な揃いの文様が描かれるものがあります。このような組物の絵付けに用いられているのが「仲だち紙」です。

「仲だち紙」とは、和紙に墨で文様を描いた、現代的に言えば下書き用カーボン紙のようなものです。絵付けのときに、器に文様線を転写し、染付の青色顔料(呉須)や色絵具でなぞると、何個も同じ文様を描くことができます。特に、将軍家に献上された最高級の肥前磁器「鍋島」では、組物に緻密な文様を描き込むために多く用いられています。

この仲だち紙の使用状況は窯や年代で異なります。窯跡資料の線描をトレースして、仲だち紙の使用状況を調べてみると、1650年代以降、有田民窯で主に文様配置のあたりとして用いられる例がみられます。ただし、主文様の外形線など、文様的一部分に限られます。ところが、1660~80年代の柿右衛門窯の一部製品では、文様全体にも使われるようになります。

一方、有田民窯の技術を採り入れて、さらに高度な器を開発した藩窯の鍋島では、遅れて1670~80年代の大川内初期鍋島の一部製品に、文様全体に仲だち紙を用いる例がみられるようになります。1690年代以降の盛期鍋島になると、文様の細部まで仲だち紙が多く用いられます。色絵青海波水仙文皿の5枚を比べると、花びらや葉脈まで厳密に写していることが分かります。原画を器の曲面へ精密に転写するためにひと手間かけ、仲だち紙を折り込んで器に密着させたと考えられます。

このように「仲だち紙」の使用状況をみると、民窯で用いられた技術が藩窯で採り上げられ、洗練されていく過程の一端がうかがえます。(山本 文子)



色絵青海波水仙文皿 肥前・鍋島藩窯
18世紀前半

シリーズ

やきものにみる文様(42)

ほん さい もん
盆 栽 文

盆栽の起源は正確には定かではありませんが、発祥は中国で、鎌倉時代に日本に入ってきたと推定されています。中国では盆景といい、盆器の中で風景あるいは園林花木などの景観を表現するもので、日本では室町時代に庭園芸術の深まりにつれて、盆の上に砂石で山海を表現する盆石もしくは盆山が盛んに行われ、それが現在の盆栽、鉢植えにつながったといわれています。盆栽は鉢に土を入れ、樹木を植えこんで、邪魔な枝葉をはらったり、全体の形姿を整え、縮景化された自然の趣を味わうもので、近世に入って武家や町人の世界に浸透していきました。

室町時代の後期には、また、花が座敷飾りの中で大きな位置を占めるようになりました。生花は仏教における供花(くげ)から出たものですが、鎌倉時代末頃から供花は立花(たてばな)とも呼ばれ、宗教的な意図から離れ、鑑賞的な意味が加えられ、東山文化の中で室内装飾としての地位を固めていきました。また砂の物(砂物)というものも行われ、これは砂を入れた平鉢に花を生けたもので、立花の一形式ですが外見上は盆栽とよく似ています。

江戸前期に江戸で園芸がブームとなり、椿、牡丹、躑躅などの栽培が盛んに行われるようになり、それを反映するように17世紀後半の肥前磁器にしばしば盆栽や鉢植え文様が描かれます。鉢は足付きの角形鉢が多いが、丸形や輪花形の器形も見られます。文様からは盆栽鉢か砂物鉢かは判然とせず、また材質もはっきりしません。18世紀になると将軍家周辺での植木鉢注文が記録上で現れるようになり、肥前磁器製の植木鉢がしだいに普及していくものと考えられ、逆に18世紀以降、盆栽や鉢植えを表した文様はしだいに少なくなっていく。(宇治 章)



染付盆栽文皿 肥前・有田
1650~60年代 柴田夫妻コレクションⅡ-346